

# とびこえる教室

フェミニズムと出会った僕が

子どもたちと考えた「ふっう」

星野俊樹

- ・本書には、家庭内暴力や精神的な抑圧、差別的な言動、性的マイノリティに対する偏見など、読む方によってはつらさを伴う記述が含まれています。これらの語りは、筆者自身の経験に根ざしたものであり、構造的な暴力や抑圧の仕組みを捉えるために記されたものです。読んでいてつらくなったときは、どうか無理をせず、読むことを中断するなど、ご自身を守る選択をしてください。
- ・子どもたちのプライバシーに配慮し、エピソードなどに一部改変を加えています。改変は実践の本質に影響しない範囲で行っています。また、本文中の子どもたちの振り返りなどは、掲載の了承を得た上で引用しています。
- ・本書では、「彼ら」と「かれら」を意図的に使い分けています。「彼ら」は男性の集団を指す際に使用し、「かれら」は性別によらない集団を示すジェンダーニュートラルな表記として用いています。
- ・社会の中で起きている不平等や差別を可視化するために、あえて「女性」「男性」という言葉を使っています。これは、性別を二つに分けて固定する意図ではなく、むしろ「その枠組みがどう機能しているか」を問い直すための手段です。ノンバイナリーやトランスジェンダーの人を見えなくするものではないことを、ご理解ください。

Whoever you are, wherever you are... I'm starting to think we're a lot alike. Human beings spinning on blackness. All wanting to be seen, touched, heard, paid attention to."

— Frank Ocean, "thank you's," Tumblr post, July 4, 2012.

「君が誰であろうと、どこにいようと……ぼくたちは案外、よく似ているんじゃないかって思い始めてる。暗闇のなかを回りながら生きている人間たちみんな、見られたい、触れられたい、声を聞いてほしい、気にかけてほしい——そう願ってる。」

(2012年6月4日「Tumblr」のポストから著者翻訳の上引用)

はじめに

## 「ふつう」アレルギーの教師

『「ふつう」って、いったい何なんだろう』

私はこれまでの人生で、何度この言葉をつぶやいてきたことでしょうか。子どもの頃、スポーツが得意ではなく、部屋でテレビゲームをしたり、女の子とおしゃべりをしたり、交換日記を書いたりするのが好きでした。初めて恋をしたのは、同級生の男の子。文化系でインドア派だった私は、いわゆる男子ノリにもなじめず、「男らしさ」とは縁遠い子どもでした。

そんな私に対して、周囲の大人やクラスメイトは「男の子ならふつうは〜」と何度も言いました。大人になつてからも、「社会人の男性ならふつうは〜」といった言葉が、日常のあちこちから聞こえてきます。それが今でも正直、息苦しい。私にとって「ふつう」という言葉は、定食屋の「ご飯ふつう盛り」くらいで十分なのに……。そんな「ふつう」との距離感を持ち続けてきた私は、大学卒業後、社会や学校が押しつける「ふつう」に揺さぶりをかけたいと考え、小学校の教師になりました。それが、20年前のことです。

今では多様性やジェンダーという言葉が広く知られるようになりました。もしかしたら、「もうジェンダー平等は達成されたのでは?」「女性や性的マイノリティへの差別はなくなつたのでは?」と思う人もいるかもしれません。しかし、実際には日本のジェンダーギャップ指数は依然として低いままです。

学校という場でも、「異性愛が当たり前」とされたり、「女らしさ」「男らしさ」に従うことが当然のように求められたりする状況は、今なお続いています。だからこそ、本書を通して、あらためて「ふつうって、何なんだろう?」と問いかけたいのです。

子どもたちが、性別や環境に縛られず、自分らしく生きるにはどうすればいいのか。「ふつう」を押しつける社会のあり方を変え、ジェンダー平等を実現するために、どのような知識や視点が求められるのか。そして、教師として学校現場で何ができるのか——。私はずっと、そうした問いを抱えながら、試行錯誤を繰り返してきました。本書では、私がこれまでの経験を通じて考えてきたことを、みなさんと共有したいと思います。

## 私の人生と実践

本書は大きく二部構成となっています。前半の第1章から第3章では、私がどのような背景

や体験を経て、ジェンダー平等をめざす教育実践にたどり着いたのかを語ります。子ども時代に「男らしさ」を押しつける家庭や学校に身を置き、傷ついてきたこと。フェミニズムと出会い、救われたこと。そうした私自身の生い立ちや内面の変化から出発しながら、フェミニズムがどのように私の教育観や人生観を形作ったのかを綴っています。

後半は、私の教育実践についてです。第4章では、実際に私が行った「生と性の授業」について書きました。「生と性の授業」は、2017年から2年にわたって取り組んだ授業です。授業を通じて、「女らしさ」や「男らしさ」といったジェンダー規範やジェンダーバイアスだけでなく、セクシュアリティについても子どもたちと共に考え合いました。この授業は2018年5月にBuzzFeedで記事化され（『あの日の僕や君を救いたかった。「生と性」を小学生に教えた担任の2年間』）、ネット上で反響がありました。この記事がきっかけとなり、私はジェンダー平等をめざす教育実践をしている教師として認知され、自分の授業や考えを社会に発信する機会をいただくようになりました。これまで私は、いくつかの本や記事の中で「生と性の授業」について、書いたり話したりしてきましたが、本書では、失敗や葛藤も含めて、これまであえて語らなかつたことや語れなかつたことを包み隠さず書いています。

また、第5章では、はたして学校はジェンダー平等が達成されているのか、子どもは性差別を行う主体なのか、教室における性差別はどのような形で現れるのかといった視点から、性別

関係なく、誰もが安心して過ごせる学校や教室を、どのように子どもたちと作り上げていけばいいのかについて考え、実践したことを、エピソードを交えて書きました。第6章では、自身のセクシュアリティに向き合う葛藤と、それをどう教育実践と結びつけてきたかを綴りました。第7章では、あるエリート男子校でフェミニズムを教える授業をきっかけに交わされた中学生とのやりとりから、「語ること」の責任とその可能性について考えています。

この本を手にとってくださった方は、おそらく私と同じように「ふつうって何だよ」とこれまでの人生の中で思ったことがあるのではないのでしょうか。私はこの本を、教育関係者に限らず、そう思ったことのある、すべての人たちに向けて書きました。読みながら、共感したり、勇気が出たり、問題意識を抱いたり、何かしてみようとアクションする気になったり、逆に違和感を抱いたり……。いろいろな意見や反応があるとは思いますが、この本が、性別も、世代も、肩書きも、価値観も、思想も、分断も「とびこえて」、ジェンダー平等な社会を実現するための議論や実践の叩き台の一つになることを願っています。

はじめに

4

第1章 男らしさに苦しんだ子ども時代

11

第2章 学問と出会い、世界の見え方が変わる

37

コラム

「赦し」でもなく、「告発」でもなく

56

第3章 学校で壊れた私が自分の声を取り戻すまで

67

コラム

男らしさって悪いもの？—竹野内豊とドウカティと僕—

88

第4章 私の教育実践—「生と性の授業」—

93

とびこえるダイアログ① 毛利いずみ×星野俊樹

144

第5章 「自分らしさの教育」から一歩先へ

159

コラム

秩序とは何か―「自由」と「抑圧」という二項対立をこえて

200

第6章 私の教育実践、私の物語

205

コラム

「性別にとらわれない」と「あえて性別にこだわる」の間で

214

第7章 語りが祈りになる時

221

とびこえるダイアログ② 前川直哉×星野俊樹

242

おわりに

256

カバーアートワーク：佐藤直樹      カバー写真：ただ（ゆかい）

## 第1章

# 男らしさに苦しんだ 子ども時代

この本では、まず、私自身の生き立ちからお話しさせてもらおうと思います。私が実践してきたジェンダー平等のための授業は、性別や属性などに起因する偏見やとらわれなどから自由になり、しあわせに生きるためのものです。私がこうした実践に行き着いたのは、子ども時代に「男らしさ」を押しつける家庭や学校に身を置き、苦しんだ経験があるからです。ですから、私の個人的な経験を語ることから始めたいと思います。



あきらめなされよ

あきらめなされ

あきらめなさが無事である

わたしや自由の動物だから

あきらめきれぬとあきらめる

『あきらめ節』 添田唾蟬坊

## 私はこんな家で育った

幼少時に十分に教育を受けられなかった祖父は教育熱心で、息子である父を商売人にするよりも医者にすることに躍起だったようです。祖母は祖父の事業に関わり、祖父のビジネスパートナー的な役割を担っていました。一方で母は、祖父母や父に逆らわず、専業主婦として星野家のすべてのケア労働を一身に背負っていました。

祖父や父といった年長の男性に従うことが絶対だった星野家で、本人の意思にかかわらず、父は医者になることを課されました。しかし、父は医学部受験に失敗。2回浪人し、医学部を

諦め商学部に入りました。父は浪人時代、祖父からの強いプレッシャーにさらされ、精神安定剤を飲みながら勉強していたそうです。そのことを知った時、私は父に同情したと同時に、不思議に思いました。父にとつて祖父は、決して逆らえない絶対権力者である一方で、孫である私には、やさしいおじいちゃんだったからです。

祖父は父が大人になっても、一切の口答えや反抗を許しませんでした。父は祖父に抑圧されているにもかかわらず、祖父の前では従順で、祖父の期待に応えるために「長男」としての役割を必死に果たそうとしていました。家のリビングには祖父によって掲げられた「忍耐」と書かれた大きな書額が飾られていました。私の実家はそういうところでした。

父は、私が小さい頃から「東大、一橋、慶應、早稲田以外は大学ではない」とか「あいつは〇〇大学出身だから無能だ」ということをよく言っていました。私は星野家の本家の長男として「相応しい」人間、つまり、一流大学を卒業し、高収入を得て、医者、弁護士、学者といった社会的地位が高いとされる人間になることを期待され、小学校に入る前には知能指数を高める塾に通わされました。当時は、校内暴力といった公立中学校の荒れも社会的な問題になっていたこともあり、不安に感じた両親は、なおさら私を小学校から私立に入れようと思ったようです。

今でも覚えているのですが、塾では「煉瓦」や「兄弟」といった漢字をフラッシュカードで

覚えさせられたり、複雑な立体を見て、そこに立方体の積み木がいくつ積み上げられているのかを瞬時に数えさせられたりしました。就学前の子どもがそのようなトリッキーな課題を訓練によってスピーディーにこなしていく様子は、今にして思えば、さながら中国雑技団の超絶技巧のようでした。

テストは定期的に行われ、その都度、点数が出ました。子どもだった私にとってその数値が具体的に何を意味するのかはよくわかりませんでした。点数が高ければ大人たちにたくさん褒められたので、「どうやら『テストの点数』が高いとえらくて、低いとダメらしい」と思うようになりました。

## 受験に失敗して入った私立小学校

満を持して挑んだ小学校受験でしたが、第一志望は落ち、受かったのは滑り止めでした。第一志望に落ちたのがわかった時の両親の悲しそうな顔は、脳裏に焼きついています。「お父さんとお母さんを悲しませてしまった。僕はいけないことをしてしまった」と子どもながらに罪悪感を抱いたことを今でも鮮明に覚えています。

私が入学した私立小学校は、中学校受験に特化した塾のようなところでした。中学校受験率

はほぼ100%で、4年生になると、週1の補習が始まり、5年生が終わる頃には6年間の勉強を終わらせませす。6年生になると学校内のテストの順位で、上位からA〜Cに分けられ、各教科の授業を受けます。私の成績は中の下といったところで、どの教科もBクラス。建前上、ホームルームのクラスは成績順で分けられていませんでしたが、私たちにとっては成績順のクラスが実際のクラスでした。今でも忘れられないのが、ホームルームのクラスが同じ子同士が喧嘩をしていた時、Aクラスの子が「お前、Cクラスのくせに生意気なんだよ」と相手を見下していた光景でした。私はBクラスでしたが、その言葉を聞いて「Aクラスじゃないと、頭が悪いと、こんなふうにバカにされるんだな」と自分の成績に強い劣等感を抱き、Aクラスの子たちに憧れを抱くようになりました。

### 先生に殴られないから「女子はずるい」

私の通っていた小学校は、「女らしさ」や「男らしさ」といったジェンダー規範を無邪気に礼賛する校風でした。今でも覚えているのは、学芸会で、男子はスウェットと短パンを着させられ「キャプテン翼」を、女子は「デイズニーマドレー」を歌わさせられたこと。また、体育の男性教師は、男子に厳しく体罰をふるう一方で、お気に入りの女子を自分の膝の上ののせて

「可愛がつて」いました。その男性教師が指導を行う運動会では、高学年になると男子は上半身裸になり騎馬戦と組体操を、女子はポンポンを片手にダンスを踊らなければなりません。性別により種目が決まっていることや上半身裸になることが心底嫌でした。

当時、私は一般的に男子が好きなスポーツや外遊びよりも、部屋の中で絵を描いたり本を読んだりするのが好きで、男子よりも女子と話すほうが多かったため、父からはよく「女の腐ったやつ」と言われていました。そんな自分が、「男らしく」上半身裸になつて騎馬戦や組体操に参加することは、自分らしくないと感じ、強い拒否感を抱いたからです。騎馬戦も組体操もダンスもどれもしたくありませんでしたが、あえて競技を選べるのであれば、ポンポン片手のダンスのほうがまだマシでした。

女子の中にも、騎馬戦や組体操をしたかった子がいたはずですし、男子の中にも、私のようにダンスをしたかった子がいたはずです。しかし、そういう子どもの意思が尊重されることは一切ありませんでした。また、上半身裸になつた男子たちが「たくましく」「勇ましく」騎馬戦や組体操をしている（させられている）姿を見た親たちが、無邪気に感動して涙ぐむのが毎年恒例の光景でした。学校側は、男子を上半身裸にして「たくましさ」や「勇猛さ」を演出したかったのでしょう。当時の私は言語化することができませんでしたが、「たくましさ」や「勇猛さ」を男子の専売特許にすることへの気味悪さも感じました。

けれども、周りを見渡してもこのような違和感を口に出している人は誰もいなかったの、そんなふうに感じている私のほうが「ふつう」でないのだと思い、無理やり納得するしかありませんでした。そして、「嫌だ。怖い、つらい。やりたくない」と弱音を吐くことは「男らしく」ない恥ずべき行為なのだと思うようになりました。

騎馬戦と組体操の練習はとてつらいものでした。入場行進は軍隊のようにきっちり揃うまで何度もやり直しをさせられ、できなければ体育教師から怒鳴られ、太鼓のバチで叩かれたり、ビンタされたりしました。昭和では、教師が暴力をふるうことは珍しくはありませんでした。また、上半身裸で裸足だったため怪我也絶えませんでした。その時に私を含めた男子たちからあがったのは、「組体操が嫌だ」「裸になりたくない」という訴えではなく、「女子はズルい」という不満でした。「自分たちは叩かれながら練習しているのに、女子は楽をしている。不公平だ」と。

弱音を吐くのは「男らしく」ないと思いついでいたのかもしれませんが、そもそも言われた通りにやらなければ暴力をふるわれるような状況で、嫌だと言う選択肢があることすら知りませんでした。少なくとも私は、自分のつらさを大人に訴えることができないかわりに、怒りの矛先を女子に向けていました。

ここ数年、SNSなどで女性が差別や生きづらさを訴えている時に、男性が「男も生きづら

いのだ」と主張する光景を目にすることがありますが、私の子ども時代と同じこと、つまり、男子がつらさを訴えられず、「女子だけずるい」と言っていた構造と同じことが続いているように見えてなりません。

### 突如、暴力教師に変貌した塾の先生たち

中学校受験を意識して塾に通い始めたのは、4年生からでした。5年生からはそれまでの塾に加え、大手の塾にも行くようになりました。平日は塾、日曜は大手の塾だったので、休みの日は一日もありませんでした。家から学校まで少し遠かったため、下校時に塾のそばにあるダスキンドーナツで母と待ち合わせ、制服から私服に着替えたあと、お弁当を受け取り、そのまま塾へ向かいました。平日、塾から帰宅するのは夜10時ごろでした。

学校が私立で、毎日塾通いの私には、地元の友達が一人もいませんでした。だから家のそばの公園で、学校が終わったあとに遊んでいる公立の子たちを見て、とてもうらやましかったのを覚えています。そんな私にとって、塾は学校以外の子たちと過ごせる場所だったので、それほど嫌ではありませんでした。塾の先生たちもやさしく、面白く勉強を教えてくださいました。

しかし、6年生の夏期講習になったら先生たちの様子が一変しました。これまでやさしかっ